

■ 特集「現場に生かす人間関係研究」

## キャリアに関する体験的学習についての考察

—学習論的観点から—

浦上昌則

(南山大学人文学部心理人間学科)

### キャリア教育における体験的学習の意義

近年、キャリア教育を意識した教育の実践が、中等、高等教育の現場で盛んになってきている。なぜ今キャリア教育が必要であるかという問題については、様々な場面で言及されている。その一例を2004年1月に発表された「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—」にみてみよう。

報告書ではキャリア教育の定義を、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」としている。そして、このようなキャリア教育が求められる背景として、学校から社会への移行に関する課題と、子どもたちの生活や意識の変容の2点を取り上げている。移行に関しては、就職・就業をめぐる環境が激変していることや、勤労観、職業観の未熟さといった子どもたちの資質等をめぐる課題が、子どもたちの生活・意識の変容については、精神的・社会的自立が遅れる傾向や未熟さといった、子どもたちの成長・発達上の課題と、高学歴社会におけるモラトリアム傾向が指摘されている。

このような背景において、インターンシップのような短期の職業体験や、職業人による講演会の開催、職業人へのインタビューなど、啓発的経験としての職場体験学習や職場訪問などを実施する傾向が強まってきている。先の報告書からもわかるように、キャリア教育の目指すものは、抽象的であり観念的なものである。そのため、そのような指導内容を、具体性・現実性を持ったものとして理解することに役立つ、日常生活の中や計画された状況下での経験や体験、すなわち啓発的経験が積極的に活用されているのである。

以上のことから、キャリア教育の目的とその特徴にしたがうと、職場体験学習や職場訪問は積極的に実施されるべきといえよう。ところが、児童・生徒、そして学生は現実の世界から隔離されているわけではないので、その生活の中で人がさまざまな形で働いている姿は目にしているはずである。また高校生や大学生では、アルバイトという形で仕事と直接的にかかわっている場合も少なくない。それなのに、なぜ体験学習的なものがさらに学校教育の中に必要なのだろうか。

ここには、実生活における体験や観察には何かが不足しており、それを補い、またより合目的的に学習を促進させる必要性があるという認識の存在を指摘できよう。そのため、職場体験や訪問時の観察といった啓発的経験をより有効に機能させるための考察が不可欠である。しかし、残念ながらその検討はほとんど行われていないのが現状であろう。本小論では、この問題に取り組むための理論的背景を整理しておきたい。

## 日常的経験と啓発的経験

まず、日常的に働いている人の姿を見るとか、アルバイト体験は啓発的体験となりえないのかという点について触れてみたい。人は経験から学んでいく存在であるという前提をとるならば、特に職業やキャリアといった極めて身近な問題に教育的な介入は不要であると考えられる。毎年発表される大学生の就職人気企業を見ると、単に大企業というよりも、実際の生活の中でよく目にする企業名、一般向けにプロモーションをしている企業名が並ぶ。換言すれば、そのような企業名しか並ばないのである。接触する頻度が高いために、それらの企業が多くの子供から支持されるのであれば、確かに人は経験から学んでいるといえよう。しかし実際には、親は働いている、マスメディアを視聴する、買い物等で外出する、アルバイトをしているといった職業に触れられる学習条件がそろっているにもかかわらず、職業意識は未熟なままといったケースは少なくない。すなわち、先の前提は常に成り立つわけではないのである。

この点に関しては、藤本(1991)が、日々の経験については、その中で自分の能力・興味・関心の有無を読みとり、情報を読みとることができれば、それが啓発的経験となると指摘している。ある製品・ブランドに関心を持ち、それを作っている会社名前を知ること、さらにイメージをひろげていく。このような経験が、先に記したような企業の人気を作り出しているといえよう。他方で、いくらニュースで企業の動向が報道されているのを視聴しても、ニュース自体や取り上げられていることに興味や関心を持たなければ、それは啓発的経験にはなりにくいのである。

なおアルバイト経験については、浦上(2003)も指摘するように、その職業意識に対する影響は明確でない。関連がある、もしくは関連はない、と結論でき

るほどに知見が蓄えられていないのである。もちろんそれを啓発的経験とすべく働きかけることは可能であろうが、啓発的経験になっているのか否かを現段階で判断を下すのは難しいといえる。

## 観察学習

観察学習（モデリング）の成立については、Banduraによるモデル（図1）がよく知られている。職場体験や観察からの学習が成立するプロセスの基本モデルと考えてよいであろう。換言すれば、このようなプロセスが進まないと学習が成立しにくいこととなる。そのため、指導者や支援者は、プロセスを進展させるように介入する必要があるだろう。

たとえば注意過程に注目してみると、当然のことながら、モデルが観察者の注意を引かなければ観察者のモデリングは生じない。また、観察者がモデルのどこに着目すればよいのかがわからない場合は、学習効果は低下すると考えられる。日常的な体験を啓発的経験として活用することを考えるうえで、また体験的学習や訪問などを計画する際にも役立つモデルといえる。

ところが観察学習は、行動や態度の学習には適当なモデルと考えられるが、興味や関心といった内的な変化やその方向性についての学習という点では、そのメカニズムを適切に表現しているとは考えにくい。興味や関心は、モデルの持つそれを受け取り、まねるということだけでは説明しがたいからである。そのため次には、体験や観察から興味・関心へとつながる過程についての理論を概観してみたい。

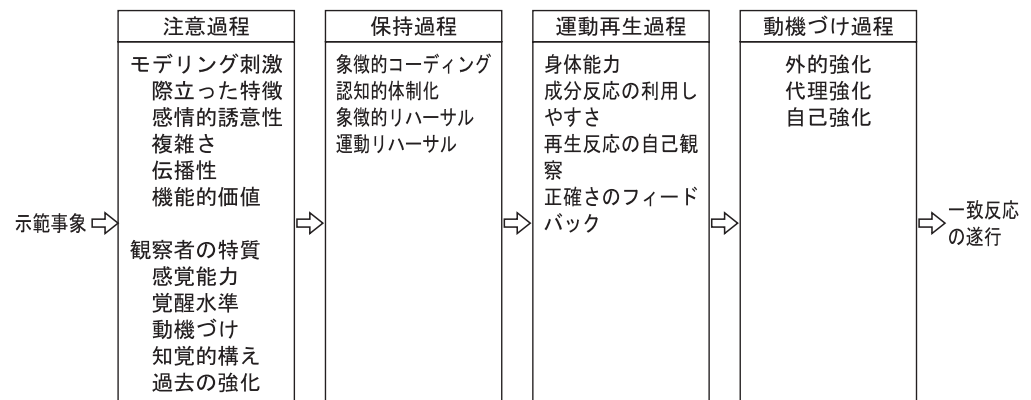


図1 モデリングの下位過程（Bandura,1971より）

## 体験・観察から興味・関心へ

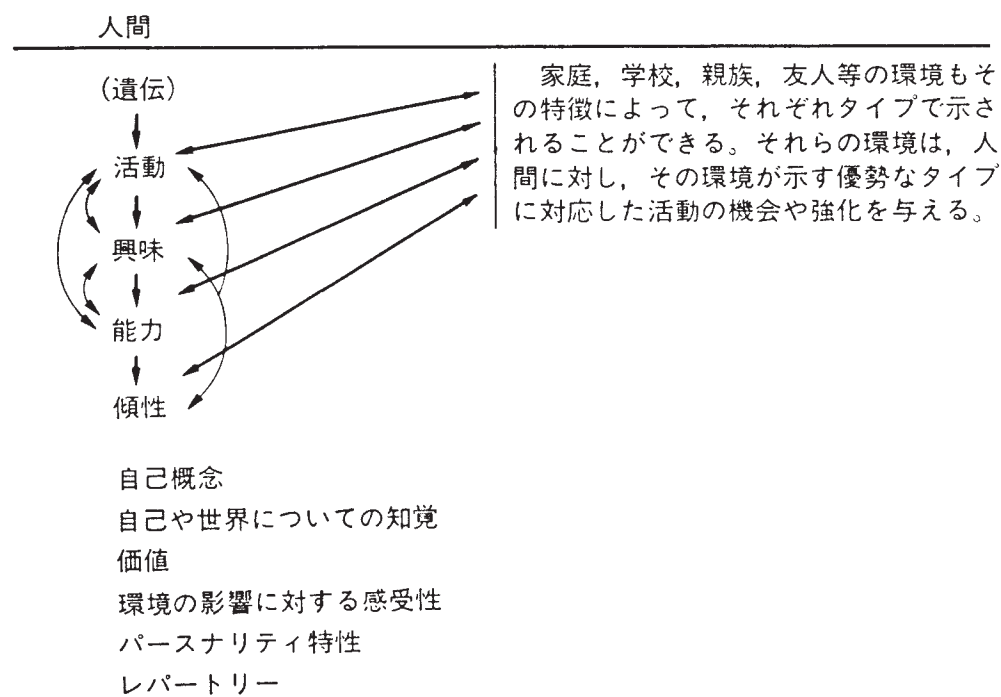
従来のキャリア理論をみても、人の興味や関心が、一時的な経験によって左右されるものとは考えにくい。しかし実施者の願いは、それが興味や関心のきっかけになってほしいというものであろう。そこで、これらの経験がどのように

興味・関心へとつながっていくと理論化されているのかを概観してみる。

まずHolland（1985）のパーソナリティ・タイプの発達についての考え方（図2）を参考にしてみる。これにも興味は含まれており、「活動」→「興味」→「能力」→「傾性」という発達の方向性が仮定されつつも、両端に矢印のついたループで多様性も示されている。図内にも説明があるように、このような進行の背景には学習理論でいう強化の考え方がある。

またKrumboltzは、Banduraによる社会的学習理論を応用し、その理論的枠組を理由して進路選択や職業選択の過程を説明している（たとえばKrumboltz, Mitchell, & Jones, 1976）。この理論におけるもっとも中心的な仮説は、進路選択行動は学習の結果であるという点であるが、主体の認知的判断という要因も大きく取り入れられている。この理論における興味は、原因としての学習経験と、後の選択や行動を結びつける、一つの自己観察般化（self-observation generalizations）であるとされる（Mitchell & Krumboltz, 1996）。自己観察般化とは、自分自身についての信念であり、さまざまな学習経験から形成される。そのため、個人の経験に対する解釈が大きな役割を果たしていると考えられる。

このKrumboltzら理論の発展型ともいえるものが、Lent, Broun, & Hacktt（1994）による社会・認知的進路理論（Social Cognitive Career Theory）であろう。図3のように、学習経験による自己効力感や結果期待が興味に影響するとモデル化されている。すなわち、経験してみて「自分にもできそうだ」という自己効力感が育まれることによって、結果に対する期待も高まり、確固とした



注：発達通常、活動から傾性へと進む。子供が好む活動は、乳幼児期に特有な、粗大かつ拡散した活動から出現する。両端に矢印の付いたループは、パーソナリティ・タイプの発達に様々な仕方があることを示している。また、我々の仮定では、遺伝的素質の個人差は活動の選択、強化子への好みに対して、影響を及ぼすと考える。例えば、身長、性、運動の巧みさ等はスポーツの選択や、その選択したスポーツでの役割等に影響を与える。

図2 パースナリティ・タイプの発達についての仮説

興味形成されるというのである。Krumboltzら理論では、興味は自己観察般化の一形態であるとされていたが、この理論では、その部分のメカニズムがより明確にされているといえよう。

いずれも学習論的立場を持ついくつかの理論をあげてきたが、以上の各理論の様相から、体験や観察から得られたものに、どのような強化が与えられるのか、また個人がそれをどのように解釈し判断するのかというポイントが、興味や関心へのつながりを規定している。さらには、それが後の行動を左右すると考えられるのである。

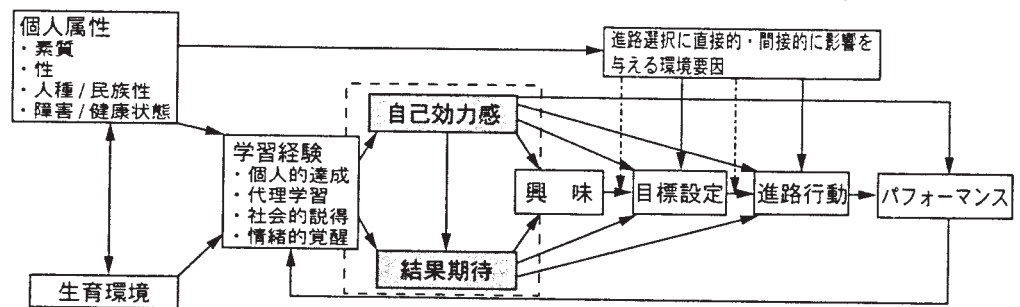


図3 進路選択モデル（安達、2003より）

## おわりに

本小論では、キャリア教育における啓発的経験の重要性にかんがみ、それを効果的に行うための理論的視座を簡単にまとめてみた。日常的経験の活用を考えたり、職場体験や観察の計画時などにおいては、観察学習のモデルが示唆を与えてくれるだろう。特に観察者の構えをつくる事前指導などで、留意するポイントを明示してくれるものと考えられる。また体験や観察から、興味へのつながりを考える際には、強化を与えることや判断・解釈への適当な介入が必要と考えられる。

各校の実践報告や研究の多くでは、キャリア教育における体験的学習の肯定的な影響が示唆されることが多いが、川崎（2003）の研究のようにその再考を促すような研究結果も提出されている。キャリア教育における体験的学習の効果を議論するにはまだ資料が不足しているといっただろう。理論検証的な研究や実践研究がさらに蓄えられ、より効果的な方法論が構築されることが望まれる。



## 文献

- 安達智子 2003 SCCTによる進路発達過程について 東 清和・安達智子  
(編著) 大学生の職業意識の発達 学文社 Pp.47-63.
- キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議 2004 キャリア教育  
の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書－児童生徒一人一人の勤労  
観、職業観を育てるために－  
([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801/002.htm))
- Bandura,A. 原野広太郎・福島脩美 共訳 1975 モデリングの心理学：観察  
学習の理論と方法 金子書房 (Bandura,A. 1971 Analysis of modeling  
processes. In A. Bandura(Ed.), *Psychological modeling: conflicting theories*.  
Chicago: Aldine Atherton, Pp.1-62.)
- 藤本喜八 1991 進路指導論 恒星社厚生閣
- Holland,J.L 渡辺三枝子・松本純平・館 暁夫訳 1991 職業選択の理論 雇  
用問題研究会 (Holland,J.L 1985 *Making vocational choices*(2nd ed.).  
Englewood Cliffs. NJ: Prentice-Hall.)
- 川崎智恵 2003 家庭科におけるキャリア教育モデルの検討－能力領域の尺度  
の構成を中心に－ 進路指導研究, **22**(1), 25-34.
- Krumboltz,J.D., Mitchell,A.M., & Jones,G.B. 1976 A social learning theory of  
career selection. *The Counseling Psychologist*, **6**, 71-81.
- Lent,R.W., Brown,S.D., & Hackett,G. 1994 Toward a unifying social cognitive  
theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of  
Vocational Behavior*, **45**, 79-122.
- Mitchell, L. K., & Krumboltz, J. D. (1996). Krumboltz's learning theory of  
career choice and counseling. In D. Brown & L. Brooks (Eds.), *Career choice  
and development* (3rd ed.). San Francisco: Jossey-Bass. Pp.233-280.
- 浦上昌則 2003 高校生の進路選択 現代のエスプリ **427**, 163-176.